

聖家族

2010.12.26

マタイ 2・13-15,19-23

教会の典礼暦は、クリスマスの後の今日の日曜日を聖家族の祝日として祝います。このことには大切な意味があると思われます。私たちは今年も大きな喜びの中でクリスマスを祝いました。クリスマスは今や、私たちが生きているこの国でも、教会において祝われる祝いであるだけでなく、このシーズンを彩る年中行事の一つとなっています。そのようなクリスマスの雰囲気はクリスマスが終わると、あっという間に片付けられて、新年を迎えるための歳末のあわただしさの中に飲み込まれてしまいます。クリスマスは終わったのです。クリスマスは確かに大きなイベントであったかもしれないけれども、それはクリスマスまでのことで、それが終わるとどこかに行ってしまったかのようです。そのような社会に生きる私たちも、気をつけないと、クリスマスをクリスマスとして祝うことだけで満足してしまうことになりかねません。

私たちはクリスマスの真の意味を知っているはずですが。クリスマスの夜、私たちの中にお生まれくださった神のみ子は、ベツレヘムの馬屋にお生まれになったときと同じように、歳末のあわただしさに翻弄される私たちの中にいてくださるのです。そして迎える2011年の、私たちの歩みに身を委ねてくださろうとしているのです。夢のお告げを受けたヨセフに急き立てられて、聖母の胸に身を委ねてエジプトの地に旅立たれたように。しっかりイエスを胸に抱きしめ、遠い異国の地を目指して旅立ったマリアとヨセフは、イエスが共にいてくださることによって、取り返しのつかない悲しみから救われたのです。

それにしても、ヘロデ王が送った兵士たちの残虐な手に掛かって、いわばイエスの身代わりのように虐殺された幼子たちのことが私たちの心を締め付けます。何故、神は、ヨセフの夢に現れた天使を遣わして、ヘロデにそのような蛮行を思いとどまらせるようにはしてくれなかったのでしょうか。遠い国から、お生まれになったイエスを拝みに来た博士たちを何故まっすぐにイエスのもとに導かずに、ヘロデの王宮に迷い込ませたのでしょうか。イエスをヘロデ王の手から救い出された神は、何故、あの幼子たちの命を救おうとはなさらなかったのでしょうか。

聖書は、その初めから終わりまで、このような神に対する私たちの怒りの抗議を引き出さずにはおかない記述に満ちています。何故、神はアダムとエワに対して、あの木の実を食べるように仕向けたのでしょうか。何故、イエスはみすみすイスカリオテのユダを、あの晩餐の席から出て行かせてしまったので しょう

か。終末の裁きにおいて、何故、神は全ての人を光のみ国に受け入れてはくさらないのでしょうか。

自分たちがベツレヘムを抜け出した後、そこで起こった出来事をヨセフとマリアが知った時、彼らはどのように思ったのでしょうか。自分たちの間にいる乳飲み子が本当に天使の告げた神の子であると、二人は信じ続けることが出来たのでしょうか。そのようなことさえ考えるゆとりがないほどに、マリアとヨセフは、私たちが生きる現実を生きたのです。そのような彼らが直面した現実の中にあつてマリアとヨセフは、天使が告げた神の子である、彼らのイエスをその手から離すことはなかったのです。

イエスを救い主と信じる教会の信仰の中で、今日の福音のエピソードを書いた作者は、どのような思いをもってこれを書いたのでしょうか。今日の福音を書き記した作者も、困難な宣教活動に従事しながら、迫り来る迫害の予感を覚えつつ、内部にユダヤ人キリスト者と、異邦人キリスト者との深刻な対立と相互不和を抱えた初代教会の現実の中で、イエスの十字架の死を体験した弟子たちから伝えられた、教会の信仰を後世に伝えようとしたのです。

私たちが信じる信仰は、十字架につけられて死んだイエス・キリストを信じる信仰です。そうしようと神がなさったなら、いくらでも別な仕方で人類に幸せをもたらすことが出来たはずなのに、神はその御子イエス・キリストの十字架の死によって人類に、そして、この私に救いをもたらしておられることを信じる信仰です。最愛の御子が、人々の手に渡され、十字架につけて殺されることを受け入れた神は、人間である私たちが作り出している現実を前に、何の力も発揮できずにいるようです。それが罪の力です。私たちのこの世界は、私たちの現実の日々は、人間である私たちが生み出す、神の介入さえも許さない冷酷な罪の力によって支配されているのです。何故、家族同士の間にも不和がするのか。何故日々、心を凍らせるような悲惨な事故や事件のニュースが報じられるのか。何故こんなにも多くの人が平和を望んでいるのに、戦争の火種は絶えることがないのか。私たちがささやかでもいいから幸せを感じたいと願っているのに、幸せを感じられないでいる人が、何故こんなにも多いのか。

神がないからではありません。私たち人間が作り出す罪の力が、神の力を封じ込めようとしているのです。そのような現実を私たちは生き、マリアとヨセフも生きられたのです。そのマリアとヨセフは過酷な現実に追い立てられるようにしてエジプトに逃れ、異国の地にある間も、ナザレにたどり着いてそこでの生活がようやくにして軌道に乗ってからも、イエスから離れることはなかったのです。これが、今日私たちが思い起こす、聖書が語る聖家族の生活です。

クリスマスを祝った後の今日、聖家族の祝日を祝いながら、私たちのクリスマス

スの祝いがムードに流されて、一時の喜びの祝いに終わることないよう、心を引き締めなければなりません。私たちが今年も祝ったクリスマスが、私たちにもたらした喜びが何であったかを噛み締めなおすよう、今日の聖家族の祝日は私たちに求めているのです。

今日の聖家族の祝日のミサをもって、この一年の日曜日の私たちの信仰の集いは終わりとなります。迎える2011年の私たちの歩みが、エジプトに向かった聖家族の旅のように、この世界の厳しい現実には追い立てられたものとなろうとも、マリアとヨセフが、その現実の中に共にいてくださるイエスを手放さなかったように、私たちも私たちのうちにいてくださるイエスを抱きしめて、決意を新たに新たな旅立ちをしたいと思えます。その決意の証として、一年を締めくくる今日のミサを共におささげいたしましょう。

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高